

小学校英語の評価を大学生がどのようにとらえているか — J-POSTLを用いた評価に焦点を当てて —

染谷藤重¹⁾ 本田勝久²⁾

¹⁾東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科・博士課程 ²⁾千葉大学・教育学部

What do university students think about the evaluation of English in primary schools?: Focusing on evaluation with J-POSTL

SOMEYA Fujishige¹⁾ HONDA Katsuhisa²⁾

¹⁾Doctor Course, The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

²⁾Faculty of Education, Chiba University

本研究では、JACET教育問題研究会(2014)が作成したJ-POSTLの小学校英語教員養成版を作成し、現在の教員養成課程の学生が、小学校英語に関してどのように考えているかを把握し、今後の教育学部の小学校英語教育にはどのような要素が必要であるかを明らかにすることにある。2020年度からの小学校英語「教科化」を踏まえて、今後、小学校英語を教えていく学生が身につけるべき資質や能力を把握し、大学側にも今後どのように評価方法を教えていったらよいのかの一つの示唆になりうる。本研究では、新しく作成した小学校英語教員養成版J-POSTL(15項目)を探索的因子分析にかけ、教員養成課程の学生がどのような因子を持つかに関して検討した。分析の結果、「測定法の考案と評価($\alpha=.88$)」「言語運用($\alpha=.83$)」「自己評価と相互評価($\alpha=.90$)」「国際理解($\alpha=.85$)」という4つの因子が抽出された。また、ヒストグラムを示すことによって、それぞれの因子の特徴を明らかにした。そして、4つの因子間の平均値に差があるかどうかを検討するために一要因の分散分析を行った。その結果、有意な差が見られた($F(1, 3)=4.50, p=.000, \text{partial } \eta^2=.03$)。そこで、Bonferroniの多重比較を行った。多重比較の結果、「測定法の考案と評価—言語運用($p>.01$)」「測定法の考案と評価—自己評価と相互評価($p>.05$)」の間で、有意な差が見られた。最後に、小学校英語に関して、不安に思っていることや疑問に思っていることに関する自由記述を行い、その結果から、評価内容や方法を知らないことに関する不安や疑問、学生自身の英語力の無さに関する不安などの記述が見受けられた。

For this study, we completed an elementary school English teacher training version of J-POSTL made by JACET Kyouiku Mondai Kenkyukai (2014). The basis of this study is to comprehend what students in the current teacher training course think about English in primary schools and to clarify what elements are necessary for future education departments. This is necessary for students who will teach English in elementary schools in the future. Also, the results can suggest how university teachers should be taught evaluation methodology. In this study, we examine J-POSTL (15 items), which we made for students of an elementary school English teacher training course. We used factor analysis to examine what kind of factor the student teachers had. As a result of that analysis, we abstracted four factors: “method of measurement and evaluation ($\alpha=.88$),” “language performance ($\alpha=.83$),” “self-evaluation and mutual evaluation ($\alpha=.90$),” and “international understanding ($\alpha=.85$).” In addition, we clarified the characteristics of each factor by showing a histogram. I performed a one-way ANOVA to consider whether there was a difference in mean between the four factors. A significant difference was seen ($F(1, 3)=4.50, p=.000, \text{partial } \eta^2=.03$). So, we performed a Bonferroni multiple comparison analysis. As a result of that analysis, we found the difference both “method of measurement and evaluation – language performance ($p>.01$)” and “method of measurement and evaluation – self-evaluation mutual evaluation ($p>.05$).” Finally, we freely describe the anxiety and doubt surrounding teaching English in primary school, particularly about not knowing evaluation contents or methodology, and the students’ lack of English proficiency.

キーワード：小学校英語教育 (English education of primary schools) 評価 (evaluation)
J-POSTL (Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages)

連絡先著者：本田勝久 k-honda@faculty.chiba-u.jp
Corresponding Author :
HONDA Katsuhisa k-honda@faculty.chiba-u.jp

はじめに

2020年度から完全実施される新学習指導要領に伴い、小学校における英語教育は今までにない大きな変革の時期を迎えることになる。

今後は、3・4年生が外国語活動、5・6年生は教科としての英語が開始される。現場では、指導者を巡って様々な形態があるものの、今まで基本的には高学年担当の教員が主に担ってきたことに加え、今後は中学年担当の教員も外国語活動としての英語の指導をすることになる。

それゆえ、今後小学校現場に出ることとなる教員養成課程の学生が英語・外国語活動のことを深く理解し、現場に出る必要がある。現在の小学校英語教育の問題点は様々な指摘がなされているが、その中の大きな課題の一つが小学校英語の評価である(泉, 2016)。

現在まで、小学校外国語活動(英語活動)における評価研究が行われてきた。その代表例が、自己評価シートを用いた評価(萬谷, 2013)、ポートフォリオによる評価(金澤, 2014)、リスニングテストによる評価(石濱, 2015a, 2015b)、スピーキングテストによる評価(koyama et al., 2012)、Can-Doリストによる評価(泉, 2016)である。

上記のような児童を評価することに焦点を置いた研究が盛んな中、言語教師の評価に関して、『言語教師のポートフォリオ(JACET教育問題研究会, 2014)』の中で、言語教師に必要な評価内容に関して記述されている。つまり、児童と教員(教員養成課程の学生)の両方を評価する必要がある。

そこで、本研究では、小学校英語の指導に必要な資質能力の選定として、EPOSTL(European Portfolio for Student Teachers of Languages)というヨーロッパにおける言語教員養成・研修用の資質能力の自己評価指針を応用することとした。しかしEPOSTLは言語教育のための指針であるため、その資質能力の記述は日本の小学校英語教育の目標に馴染まない部分を含む。そこで本研究では、日本の外国語(英語)教育の文脈に合うように改良されたJACET教育問題研究会(2014)のJ-POSTL(Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages)を採用し、外国語活動および教科化される小学校英語に特化した指針として、その応用可能性を議論する。J-POSTLの記述を変更し、加えて研究協力者との話し合いにより項目の削除を行った。本稿では、J-POSTLを応用し作成した小学校英語の指導に必要な資質能力の記述一覧を提案するとともに、大学生の小学校英語への意識を調査し、教員養成課程の学生へのJ-POSTLを用いた評価に関する事柄を明らかにすることを目的とする。

1. 先行研究

1.1 外国語活動における評価

小学校における外国語活動の評価は、目標や内容を各学校で定める他教科とは趣旨や性格が異なることから、教科のような数値による評価はなじまないものと考えられている(泉, 2010)。したがって、外国語活動の目標

とされている「コミュニケーションの素地を養う」ことを基本とし、異文化理解や外国語の音声・表現に慣れ親しむことを評価規準とすることが大事だと考えられている。いわゆる技能の高まりについての評価にならないようにし、指導要録への記載も児童の状況などが具体的に把握できるような文章表記が基本となる(本田, 2011)。

評価方法についても、活動の観察や児童の学習記録、振り返りなどの様々な手法を利用し、各単元や単位時間に設定した指導目標を達成しなければいけないという考えではなく、児童のその実現状況を活動の観察などを通して把握し、「補完よりも発展」というイメージで評価を進めていくことが重要となる(本田・島崎, 2010)。また、指導要録の観点の作成とその具体的な方法については、各学校において工夫することとなっている(文部科学省, 2008)。つまり、学習状況の観点と外国語活動との関連を明確にし、指導要録に総括する文面をどうするかということも、各学校や児童の特性を生かしながら、評価を工夫し、児童の関心や意欲を高められるような活動にすることが、外国語活動における評価やその意義であるように思われる。

1.2 EPOSTL

EPOSTL「ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ」(Newby et al., 2007)とは、ヨーロッパにおける言語教育の教員養成課程履修生のためのドキュメントである。

JACET教育問題研究会(2014)は「言語教育実習生のためのヨーロッパ・ポートフォリオ言語教師教育のためのリフレクション・ツール」という訳をあてている。

EPOSTLは、「教員養成課程に所属する学生が、教員に必要な知識・技能を省察し、それを評価し、その成長をモニターすることを補助するとともに、教師生活を通じて教師経験を記録する」(Newby et al., 2007)のための共通の指針としてオーストリアを中心に使用されてきた。

JACET教育問題研究会(2014)は、日本とヨーロッパは教育的文脈が異なるとはいえ、言語教育の本質と方向性は大きく異なっていないとして、EPOSTLを日本に応用したJ-POSTLを作成した。

1.3 J-POSTL

上記でも言及したように、JACET教育問題研究会(2014)は、EPOSTLを日本の環境下で使えるものへと改良し、J-POSTLを作成した。このJ-POSTLの対象は、日本の外国語教育の大半が英語教育のため、英語教職課程の履修生と現職英語教師とされている。

EPOSTLの優れた点は、ただ単にポートフォリオという形式や自己評価記述文という目に見えるものの以外に、それらが作成されるに至った、しっかりした「理念」があることである。JACET教育問題研究会(2014)が指摘するJ-POSTLの理念は、①行動志向の言語観(Action-oriented view of language)と②生涯学習(Life-long learning)である。そして、5つの目的を持つポートフォリオを開発するに至った。

JACET教育問題研究会(2014)は、今回焦点を当てた「評価(assessment)」に関しては、「教育の成果に

関して、何を、いつ、どのように評価するかという点に焦点を当てる。また、学習支援と教師自身の指導改善のために、評価している時点でもたらされる情報をどのように利用するかということも扱う。」としている。具体的な内容は以下の6つである。①筆記試験、実技試験などの評価ツールの考案、②評価方法、③自己評価と相互評価、④言語運用能力に関する評価、⑤異文化理解に関する評価、⑥学習者の誤りへの対応への対処。

本研究では、小学校英語教育の評価に焦点を当てているため、①から⑤までの現在のJ-POSTLを小学校英語教育用に改良し、この尺度が教員養成課程の学生に有効であるかの調査研究を進める。

2. 調査の内容

2.1 参加者

C県にある大学の教員養成課程の学部生131名である(男性=62名、女性=69名)。

2.2 調査時期

本研究の調査は、2017年6月に行われた。

2.3 調査方法

本研究の調査は、アンケートを用いて行われた。アンケートには、5件法(1=そう思わない、から、5=そう思う)を用いた。アンケート項目は、J-POSTLに関する質問項目15項目であった。また、自由記述として、「あなたが、小学校英語の評価に関して、不安に思っている

ことや疑問に思っていることを書いてください。」という欄も設けた。

倫理的な配慮としては、調査実施前に「思った通りに回答してよいこと」「アンケートは無記名であり、個人が特定されないこと」「調査以外の目的で使用しないこと」「成績には一切関係ないこと」を書面、また、口頭で伝えた。

3. 調査の目的

本研究では以下の4つを目的とする。

- 1) 今回作成したJ-POSTLの質問項目が、日本の教員養成課程の学生では、どのような因子で構成されているか検討を行う(因子分析、信頼性分析)。
- 2) また、1)で得られた結果より、どの因子がどのような特徴を持っているかの検討を行う(記述統計量、ヒストグラム)。
- 3) さらに、それぞれの因子の間で、どのような差があるかを検討する(分散分析)。
- 4) そして、最後に、学部生から得た自由記述で、教員養成課程の学生がどのようなことを不安に思っているのか、疑問に思っているのかを明らかにする。

4. 調査結果と考察

4.1 J-POSTLの15項目の因子分析の結果

今回作成したJ-POSTLの質問項目が日本の教員養成

表1 J-POSTLの質問項目の因子分析結果

	因子			
	I	II	III	IV
第I因子「測定法の考案と評価」因子 ($\alpha = .88$)				
Q 5 信頼性があり、明確な方法で、試験の成績評価ができる。	0.93	-0.14	0.01	-0.14
Q 4 妥当性のある評価尺度を使って児童の学習活動を評価できる。	0.77	0.07	-0.08	0.04
Q 6 個人学習と協働学習における児童の能力を評価できる。	0.58	0.01	0.07	0.21
Q 7 評価の経過と結果を自分の授業に活用し、個人及びグループのための学習計画を立てることができる。	0.49	0.23	0.22	-0.15
Q 3 児童の英語運用能力が向上するように、本人の得意・不得意分野を指摘できる。	0.49	-0.02	0.17	0.12
Q 2 児童の授業への参加や活動状況を観察し評価する方法を立案し使用できる。	0.48	0.27	-0.07	0.14
Q 1 小学校英語の目的に応じて、筆記用具、実技試験などの評価方法を設定できる。	0.48	0.27	-0.13	0.09
第II因子「言語運用」因子 ($\alpha = .83$)				
Q 11 児童の話す能力を評価できる。	-0.03	0.99	0.1	-0.24
Q 10 児童の聞く能力を評価できる。	-0.05	0.8	-0.07	0.15
Q 12 児童の書く(アルファベットや単語など)能力を評価できる。	0.02	0.61	-0.07	0.24
Q 13 正確さ、流暢さの観点から児童の会話能力を評価できる。	0.04	0.44	0.19	0.04
第III因子「自己評価と相互評価」因子 ($\alpha = .90$)				
Q 9 児童がクラスメイトを互いに評価し合うことができるように支援できる。	-0.06	0	1.02	0.03
Q 8 児童が自分の目標を立て、自分の学習活動を評価できるように支援できる。	0.05	0.04	0.73	0.08
第IV因子「国際理解」因子 ($\alpha = .85$)				
Q 14 外国の文化やイベントなどに関する児童の知識を評価することができる。	-0.1	0.08	0	0.87
Q 15 日本文化と外国の文化を比べ、その相違への児童の気づきを評価できる。	0.08	-0.12	0.11	0.84

表2 因子間相関

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子
第Ⅰ因子	—			
第Ⅱ因子	0.73	—		
第Ⅲ因子	0.59	0.53	—	
第Ⅳ因子	0.71	0.59	0.56	—

課程の学生に対して、有効であるかを検討するために、まず、J-POSTLの15項目に関して、探索的因子分析を行った。ここでは、最尤法・プロマックス回転を採用することとした。

分析の結果、4つの因子を検出することができた。

第Ⅰ因子は、測定法作成に関する項目、および評価自体に関する項目で構成されていたため、「測定法の考案と評価」因子と命名した。

第Ⅱ因子は、児童の話す・聞く・書くなどの能力に関する項目で構成されていたため、「言語運用」因子と命名した。

第Ⅲ因子は、児童の自己評価とクラスメイトの評価の項目で構成されていたため、「自己評価と相互評価」因子と命名した。

最後の第Ⅳ因子は、自国と他国の文化の違いや、外国のイベントなどへの興味に関する項目で構成されていたため、「国際理解」因子と命名した。

また、それぞれの因子の信頼性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出した。表1の結果から、4つの因子すべてが、 $\alpha > .80$ であり、かなり高い信頼性を得ることができた。また、表2には、表1の因子間相関を示している。

4.2 因子の記述統計量、およびヒストグラム

まず、4つの因子のヒストグラムを図1から図4に示す。

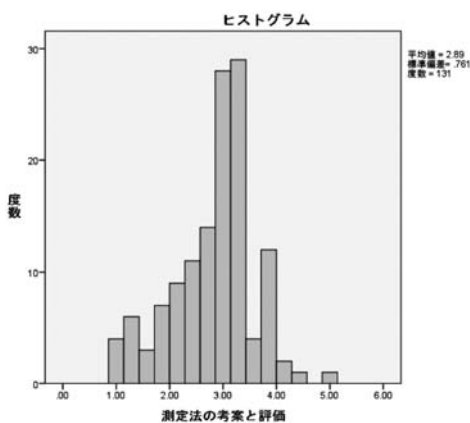


図1 「測定法の考案と評価」のヒストグラム

図1のヒストグラムを確認してみると、「3：どちらともいえない」が大部分を示していることがわかる。また、「1：そう思わない、2：あまりそう思わない」の方向に人数が代っていることが確認された。この結果から、まだ、教科としての英語が始まっていない現段階では、学生たちは、自分たちが、測定法を作成したり、そ

れを用いて評価したりすることに対しての実感が薄いように考えられる。

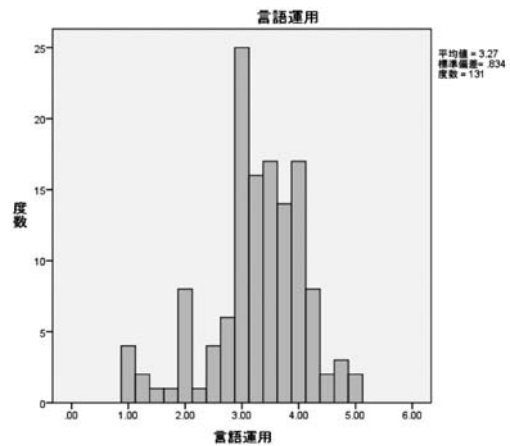


図2 「言語運用」のヒストグラム

「言語運用」因子に関して、図2を見てみると、図1と同様に「3：どちらともいえない」近辺の偏りが大きい。図1とは違う点として、「4：どちらかというと思う」と考える学生も多いということが見受けられる。この結果は、学生が、リスニングやスピーキング、ライティングなどの具体的な評価を詳しく習っていない状況で、抽象的に「児童の聞く能力を評価ができる」のような質問の仕方をしたため、学生がある程度できるという感覚を持ったのではないかと推測される。

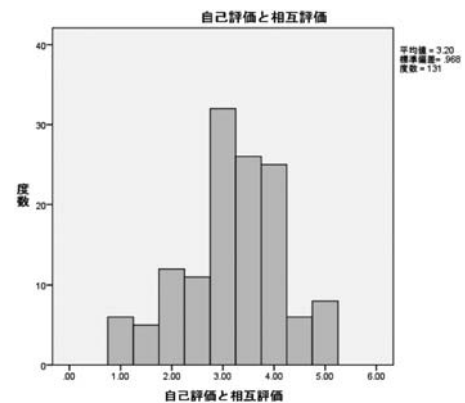


図3 「自己評価と相互評価」のヒストグラム

「自己評価と相互評価」因子に関して、図3を見てみると、「3：どちらともいえない」から「4：どちらかというと思う」によってはいるが、正規分布しているように考えられる。「3：どちらともいえない、4：どちらかというと思う」の人数が「1：そう思わない、2：あまりそう思わない」の人数より多い原因としては、おそらく、学生自身が自己評価や相互評価を高校や大学で行ってきており、その経験を基に小学生にも行うことができると考えた結果とはないかと考えられる。

「国際理解」因子に関して、図4を見てみると、「3：どちらともいえない、4：どちらかというと思う」の人数が多いように見受けられる。この原因としては、現在の学部生は、中学校・高等学校において、「国際的

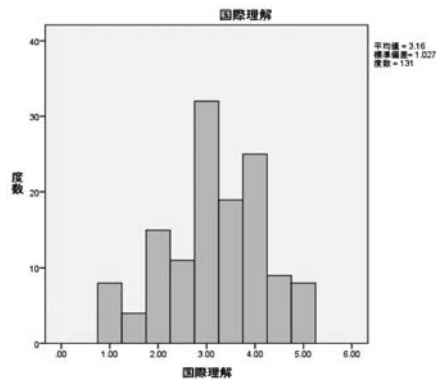


図4 「国際理解」のヒストグラム

な事柄」にも触れる機会を持っていたため、その知識を応用して、児童を評価することができると考えていると思われる。

上記の結果より、「測定法の考案と評価」以外の3つの因子に関しては、「3：どちらともいえない、4：どちらかというと思う」と回答した学生が比較的多いという特徴を得た。このように考えている学生たちが、今後、小学校英語の評価の実態を把握していくことによって、この意識がどのように変容するかは、今後とも検討していかなければならない。

4.3 因子間の差の分析

次に、4つの因子の中で、因子間にどのような差が生じているかについて調べるために、対応なし要因の一要因分散分析を行った。記述統計量は表3に、表4に分散分析の結果を示す。また、図5に平均値の差を表す図を示す。

表3 記述統計量

	<i>N</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
測定法の考案と評価	131	1.00	5.00	2.89	0.76
言語運用	131	1.00	5.00	3.27	0.83
自己評価と相互評価	131	1.00	5.00	3.20	0.97
国際理解	131	1.00	5.00	3.16	1.03

対応なし要因の分散分析の結果、各因子の平均値の差に有意差が見られた ($F(1, 3) = 4.50$, $p = .000$, partial $\eta^2 = .03$)。よって、4つの因子の間のどの部分に差が生じているかを検定するために、Bonferroniの多重比較を行った。その結果を表5に示す。

多重比較の結果、「測定法の考案と評価—言語運用 ($p > .01$)」「測定法の考案と評価—自己評価と相互評価 ($p > .05$)」の間で、有意な差が見られた。したがって、教員養成課程の学生は、言語運用や自己評価と相互評価よりも測定法の考案や評価ができないと考えているということが明らかとなった。これは、まだ、英語が教科化となっておらず、具体的にどのような測定法を用いたらよいか、どのように評価基準を設けたらよいかなどが明確でないと感じているととらえることができるだろう。

4.4 学生の自由記述から分かること

4.4.1 学生の不安

最後に、学部生が、小学校英語を評価するにあたって、不安に思っていることは何かという自由記述の質問を行った。

現在の外国語活動では、「聞くこと」「話すこと」に重点を置いた指導により、コミュニケーション能力の素地の育成を目指している。その構成要素の一部には、「教

表4 一元配置の分散分析の結果

ソース	タイプⅢSS	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>Sig</i>	partial η^2
修正モデル	11.04	3	3.68	4.50	0.00	0.03
切片	5,137.39	1	5,137.39	6,289.13	0.00	0.92
因子	11.04	3	3.68	4.50	0.00	0.03
誤差	424.77	520	0.82			
総和	5,573.21	524				
修正総和	435.81	523				

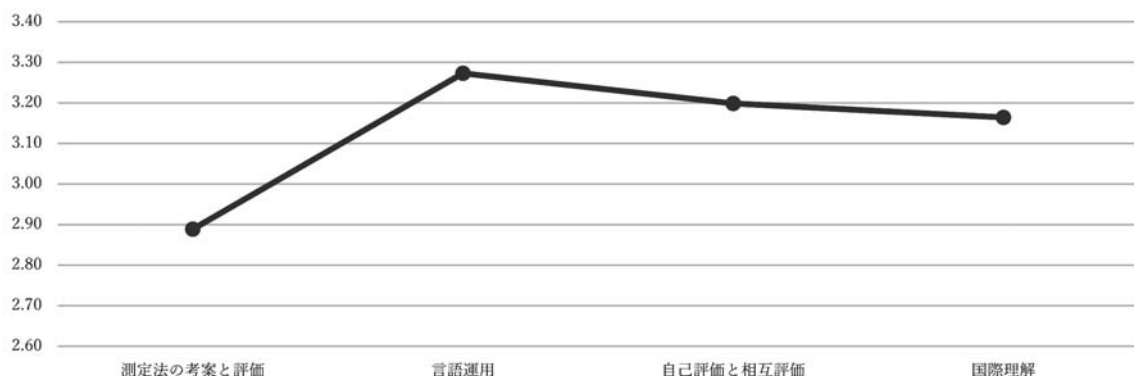


図5 各因子の平均値の差

表5 多重比較の結果

					95%信頼区間	
		<i>M</i> の差 (I-J)	<i>ME</i>	<i>Sig.</i>	下限	上限
測定法の考案と評価	言語運用	-0.38	0.11	0.00	-0.68	-0.09
	自己評価と相互評価	-0.31	0.11	0.03	-0.61	-0.01
	国際理解	-0.27	0.11	0.08	-0.57	0.02
言語運用	測定法の考案と評価	0.38	0.11	0.00	0.09	0.68
	自己評価と相互評価	0.07	0.11	1.00	-0.22	0.37
	国際理解	0.11	0.11	1.00	-0.19	0.40
自己評価と相互評価	測定法の考案と評価	0.31	0.11	0.03	0.01	0.61
	言語運用	-0.07	0.11	1.00	-0.37	0.22
	国際理解	0.03	0.11	1.00	-0.26	0.33
国際理解	測定法の考案と評価	0.27	0.11	0.08	-0.02	0.57
	言語運用	-0.11	0.11	1.00	-0.40	0.19
	自己評価と相互評価	-0.03	0.11	1.00	-0.33	0.26

師の英語力」「リスニング」「スピーキング」「音声」の4つ観点が挙げられると考えられる。

この自由記述の分析では、学生の記述の中に登場することが多かった、①英語力・②リスニング・③スピーキング・④音声指導の4つの観点到に分けて自由記述を分類した。

① 英語力

表6 英語力に関する記述

- ・自分自身が英語を話せるわけではないのでちゃんと教えることができるか不安である。
- ・自分の英語の能力が不安である。
- ・自分の英語能力で子供たちに教えられるか不安である。
- ・自分が英語ができないのが不安である。勉強しているけれどもできるようにならないのが不安である。
- ・英語に自信がないため英語が教えられるか不安である。
- ・英語が苦手で不安である。

上記のような、自分の英語能力に関する不安や自分の英語力で子ども・児童に教えられかが不安などといった英語力に不安を抱えている学生の記述が見て取れた。

② リスニング

表7 リスニングに関する記述

- ・英語で説明した時に、聞き取ってもらえるかが不安です。
- ・リスニングの評価が難しそうだと感じる。

リスニングに関しては、上記の2点しか挙げられなかったが、英語で授業を行っていく際に児童が聞き取れているかという判断や、リスニング本来の評価の難しさを感じている学生もいるということが明らかになった。このことから、教員養成の立場から、リスニングの具体的な指導内容や評価内容を指導していく必要性があると考えられる。

③ スピーキング

スピーキングに関しては、上記のような記述が挙げら

表8 スピーキングに関する記述

- ・話すことの評価は、難しいと思う。
- ・子どもの話す能力を高めたいと思っているが、自分の英語力の問題で指導が難しいと思う。
- ・スピーキングやネイティブスピーカーとの交流に不安を感じる。
- ・特に話すこと（スピーキング）の評価観点がわからないので不安である。

れた。1つは、スピーキングの評価がどのようなものなのかがわからず、評価を難しいと感じているということである。また、自分の英語力のなさで、指導の困難性やネイティブとの交流に不安を抱いている傾向にある。

これらの解決のためにも、教員の英語力の底上げや、評価法の授業の充実なども必要とされることがわかる。

④ 音声指導

表9 音声指導に関する記述

- ・小学生のレベルで「流暢に話す」というのがどの程度のレベルなのかなどの、実態がわからない。
- ・自分自身が、会話能力やリスニング能力に長けているわけではないので児童たちの発音などを評価できるかが不安である。
- ・発音が日本人的ない方でも発音が正しければ評価してもいいのかが気になる。
- ・細かな発音の違い（LとRなど）をどのように評価すべきか不安である。

音声指導に関しては、どのレベルまでを許容して評価すべきなのかという点や、自分（教師）の発音の能力の問題で評価がうまくできるかなどの不安が見て取れた。また、細かな点をどこまで指導したらよいのかというこれからの小学校英語教育の課題ともとらえられる記述も見られた。

4.4.2 学生の疑問

4.4.1と同様に小学校英語の評価に関して疑問に思っていることはないかという、自由記述を行った。そのなか

ら⑤「評価の基準」⑥「評価方法」に関する記述をピックアップし、その特徴を述べる。

⑤ 評価の基準に関する記述

表10 評価の基準に関する記述

- ・児童にどの程度までのレベル（基準）の英語を要求するのか疑問である。
- ・どの程度のレベル（基準）ができているといえるかがあいまいである事が疑問である。
- ・現在中学校で扱っている文法事項などを小学校に降ろして学ばせるのか疑問である。
- ・どこまで勉強の出来を評価するべきなのかが疑問です。
- ・どこまで4技能すべてに関して教えればよいのか、日常で扱える英語を教えるのか、それとも勉強としての英語を教えるのか。
- ・ある一定の基準をもとに評価すべきか、クラス全体を見て評価すべきか、場合によって異なると思うが明確ではないのが疑問である。
- ・小学生の英語レベルがどの程度なのかがわからないので設定が難しいのではと疑問に思った。

上記のような基準から、現段階では、学部生は小学校英語の評価の具体的な測定法や評価基準などをわかっておらず、現実、評価を実際に行うところまで到達することができていない状態であることが見て取れる。このような状態を大学側は、深刻に受け止め、小学校の教員になる学部生には、現場に出る前に、評価論というものをきちんと学習・指導する必要があると考えられる。

⑥ 評価方法

表11 評価方法に関する記述

- ・全体的に英語の評価方法がまだわかりません。
- ・何を目的としているのか疑問である。
実際にやったこともなく、小学校英語もレクに近かった
ので、どうすればいいかわからなかった。

上記の記述のように、評価方法がまったくわからないといった学部生や、実際にやったことがないので想像できないという学部生が存在することが明らかとなった。実際は、自由記述には書いてないが、このように感じている学部生は多いのではないかと考えられる。

5. 考 察

本研究では、JACET教育問題研究会（2014）がEPOSTLを日本語言語教師用に翻訳、修正したJ-POSTLの小学校英語教員養成版を作成した。

この小学校英語教員養成用J-POSTLは、①筆記試験、実技試験などの評価ツールの考案、②評価方法、③自己評価と相互評価、④言語運用能力に関する評価、⑤異文化理解に関する評価に焦点を当てて作成した。

そこで、本研究では、まず、この5つの観点が教員養成課程の学生に有効であるかを分析した。探索的因子分析の結果、教員養成課程の学生は、4つの因子を持つことが明らかとなった。一つ目を「測定法の考案と評価」、

二つ目を「言語運用」、三つ目を「自己評価と相互評価」、そして、最後の四つ目を「国際理解」とした。それぞれの因子のクロンバック α 係数をしたところ、4つの因子すべてが、.80以上だったため、これらの因子の信頼性が確認された。

次に、4つの因子のヒストグラムのばらつきを確認したところ、「測定法の考案と評価」因子のヒストグラムに、他の3つの因子には見られない傾向が見られた。それは、「1：そう思わない、から、2：あまりそう思わない」に少し人数が偏っているということである。これは、今までに、小学校英語において、筆記試験や実技試験、成績評価などの今までに小学校で行われてこなかった評価方法に教員養成課程の学生はできないと考えている傾向がある。

また、これらの4つの因子に偏りがあるかどうかを、一要因の分散分析で分析したところ、「測定法の考案と評価」の因子が、「言語運用」「自己評価と相互評価」のそれぞれの因子に比べて、平均値が有意に低いことが明らかとなった。これらの結果を踏まえて、教員養成課程の学生には、他の3つの因子も含めて、「測定法の考案と評価」に重点を置いた指導が求められる。

最後に、学生の自由記述を「英語力」「リスニング」「スピーキング」「音声指導」「評価基準」「評価方法」の6つに分けて記述を分析した。

その結果、教員養成課程の学生は、自分の英語力の無さや、スピーキングやリスニングや音声指導の評価の難しさなどに不安を抱えていることが明らかとなった。また、小学校での具体的な指導内容や評価方法などがわからずにいる学生も存在する。これらの結果から、今後は、教育学部において、小学校英語に関する具体的な評価内容を・方法を教授するとともに、学生の英語力の底上げもしていく必要がある。

6. 示 唆

2010年3月24日に、中等教育審議会初等中等分科会教育課程部会が「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」を提示した。同報告では外国語活動の評価について、「学習指導要領に定める『外国語活動』の目標、すなわち、言語や文化に関する体験的な理解、コミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことについて観点を設定し、学習評価を行うことが適当である。」と示されている。この観点を設けた学習評価について、国立教育政策研究所（2011）では、効果的な観点別学習状況の評価のためには、単元や各時間の目標に照らして評価規準を設定することを挙げている。評価規準の設定により、指導者が授業の中で求める児童の具体的な姿とともに、どう指導すればよいかが明確になるとのことである。この流れを受けて、多くの各都道府県教育委員会は、評価規準の設定についての考え方や例を示している。

また、2008年12月25日の初等中等教育局長通知以降の評価規準は、文部科学省発行の『英語ノート』指導資料が例として記載されている。しかしながら、形成的な評価や児童の成長を記す表簿として、指導資料は十分とは

思えない。各学校や地域にふさわしい評価規準や評価方法を考えることが、評価の在り方やその学校のエデュケーション課程編成を資する重要な鍵となる。評価規準も評価の観点と同様に、各学校で適切な規準が必要であり、指導資料を参考にしながらも、その学校での指導内容やその学校として子どもたちに「つけたい力」または「育てたい力」を鑑みた上で、その学校や地域としてあるべき評価規準を設定するための資料を収集し、適切な評価規準を探るとともに、目標と活動とのセットでの評価規準を提示することである。

小学校での英語が教科化されることを踏まえて、現在の小学校外国語活動における評価をあらためて検証する必要があると思われる。小学校英語における評価について、ここでは主に以下の6点を提案する。

- ・各活動についての適切な評価規準を設定することによって、ふさわしい活動・指導方法・指導計画を考案する。
- ・評価の時期と評価の方法（ワークシート、見取り、ポートフォリオ、ふりかえり）を検証する。
- ・評価の結果から授業改善につなげるリフレクション（PDCA／アクションリサーチ）を実施する。
- ・学年を通した評価表（ルーブリックの作成、到達目標の提示）を作成する。
- ・評価から中学校との連携・接続（言語材料だけではなく、経験した活動）を考察する。
- ・外国語活動のエデュケーション課程における位置づけと育てたい児童像との関連を確認する。

また、各大学（教員養成系大学など）で、外国語活動の評価に関することがどのくらい教えられているのか、学生が評価に対してどのような意識を持っているのか、を調査する必要がある。

7. 結 論

文部科学省（2017）は、2020年度から実施される『小学校学習指導要領』を公示した。「グローバル化への対応」を目指し、小学校3年生と4年生で外国語活動が導入され、現在小学校5年生と6年生で実施されている外国語活動が「英語」として教科化される。小学校高学年においては、「読むこと」「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習が求められることとなる。「英語の音に慣れ親しむこと」「コミュニケーションに対する関心・意欲・態度を育てること」などを目標としている外国語活動に対して、教科としての「英語」は、英語によるコミュニケーション能力の基礎を養うことが目標となる。親しむことがメインだった外国語活動とは異なり、英語の読み書きにも取り組み、英語のスキルを育てることに主眼が置かれる。教科書を使用しての「数値などによる成績評価」をすることにもなる。

各教員養成系大学および教育学部では、2006年7月の中央教育審議会答申（「今後の教員養成・免許制度の在り方について」）において提言された事項を踏まえ、小学校教員養成における新規開講科目や履修基準について

検討を重ねている。また、小学校のエデュケーション課程に英語が教科として追加されることに伴い、小学校教科および教職科目の履修基準を見直し、カリキュラム改正を審議している。

千葉大学教育学部でも昨年度より「小学校英語指導」が学部生に必修化され、それに対応するための授業充実が課題となっている。今後は、小学校英語教科教育法および教科専門科目を構築することが予想されるため、小学校英語教員を養成するカリキュラムを学部全体の中でどのように位置づけるかを審議する必要がある。小学校英語を担う教員を養成するカリキュラム構成案は、「教科としての英語教育」を視野に入れ、目的論・教材論・方法論・評価論などの観点から、議論されるべきものである。本稿での研究結果は、今後のカリキュラム構成や、小学校英語のための教科専門科目の履修基準や教職関連科目（初等教科教育法）の枠組みを構築することに役立つと思われる。

引用文献

- 泉恵美子（2010）.「外国語活動にふさわしい評価方法とは」『英語教育』11月号, 16-18.
- 泉恵美子・長沼君主・島崎貴代・森本レイト敦子（2016）.「英語学習者の自己効力と自律性を促進する授業設計と評価：Hi, friends! Can-Doリスト試案に基づいて」, *JES Journal*, 16, 50-65.
- 石濱博之・渡邊時夫（2015a）.「『Hi, friends! 2』に準拠した聴解力テストの開発とその運用結果に関する報告」, *ARELE*, 26, 397-412.
- 石濱博之・渡邊時夫・染谷藤重（2015b）.「『Hi, friends! 1』に準拠した聴解力テストの開発とその応用結果に関する事例報告(2)改訂した聴解力テストの試み」, *JES Journal*, 15, 18-33.
- 金澤延美・伊東弥香・山本長紀（2014）.「小学校英語用「評価ポートフォリオ」試案に関する一考察—パイロット調査1から—」『駒沢女子短期大学研究紀要』, 47, 1-14.
- 国立教育政策研究所（2011）.「評価方法等の工夫改善のための参考資料：外国語活動」
https://www.nier.go.jp/kaihatu/hyouka/shou/11_sho_gaikatu.pdf
- JACET問題研究会（2014）.『成長のための省察ツール 言語教師のポートフォリオ【英語教師教育全編】』. 東京：桐文堂.
- 中央教育審議会（2006）.「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm
- 中央教育審議会（2010）.「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/attach/1292216.htm
- 本田勝久（2011）.「小学校外国語活動における評価」『英語教育』5月号, 19-21.
- 本田勝久・島崎貴代（2010）.「学習意欲を高める評価の

- 進め方—子どもたちが考える『つきたい力』を通して」樋口忠彦・国方太司・高橋一幸・大城賢（編著）『小学校英語活動の展開—理解から実践へ』（pp.182-191），東京：研究社。
- 文部科学省（2008）．初等中等教育局長通知「小学校学習指導要領などに関する移行措置期間間における小学校児童指導要録などの扱いについて」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304407_009.pdf
- 文部科学省（2017）．「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定並びに幼稚園教育要領の全部を改正する告示，小学校学習指導要領の全部を改正する告示及び中学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について（通知）」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_1_1.pdf
- 萬谷隆一・泉恵美子・アレン玉井光江・長沼君主・田縁眞弓・大田亜紀・森本敦子・島崎貴代（2013）．「外国語活動の評価方法に関する研究：発達段階を意識した評価のあり方」，*JES Journal*, 13, 212-226.
- Koyama T., & Yukawa E. (2012). Validity of the YTK speaking test: Construct validation of a performance-based English speaking test for elementary school students in Japan, *Kyoto Notorudamu Jyoshidaigaku Kiyō*, 42, 25-42.
- Newby, D., Allan, R., Fenner, A., Jones, B., Komorowska, H., & Soghikyan, K. (2007). *European portfolio for student teachers of languages: A reflection tool for language teacher education*. Graz, Austria: European Center for Modern Languages.

付録1 小学校教員養成用J-POSTL

①測定法の考案

1. 小学校英語の目的に応じて，筆記試験，実技試験などの評価方法を設定できる。
2. 児童の授業への参加や活動状況を観察し評価する方法を立案し使用できる。

②評価

3. 児童の英語運用能力が向上するように，本人の得意・不得意分野を指摘できる。
4. 妥当性のある評価尺度を使って児童の学習活動を評価できる。
5. 信頼性があり，明確な方法で，試験の成績評価ができる。
6. 個人学習と協働学習における児童の能力を評価できる。
7. 評価の経過と結果を自分の授業に活用し，個人およびグループのための学習計画を立てることができる。

③自己評価と相互評価

8. 児童が自分の目標を立て，自分の学習活動を評価できるように支援できる。
9. 児童がクラスメイトを互いに評価し合うことができるように支援できる。

④言語運用

10. 児童の聞く能力を評価できる。
11. 児童の話す能力を評価できる。
12. 児童の書く（アルファベットや単語など）能力を評価できる。
13. 正確さ，流暢さの観点から児童の会話能力を評価できる。

⑤国際理解

14. 外国の文化やイベントなどに関する児童の知識を評価することができる。
15. 日本文化と外国の文化を比べ，その相違への児童の気づきを評価できる。